『ICU比較文化』49〔2017〕
Article accepted Sep. 30, 2016

ICU Comparative Culture
No. 49 [2017], pp. 61-92

＜翻訳＞

第三代シャフツベリ伯爵『熱狂に関する書簡』和訳と解説（下）
――1708年版の38頁から終わりまで――

菅谷　基

本稿は第三代シャフツベリ伯爵の著作『熱狂に関する書簡[(1)]』の後半部の和訳と1714年版に追加された挿絵の解説である[(2)]。前稿同様、和訳の底本は1708年版とし、古代の固有名詞の訳語は各領域の慣例に従い、底本の頁数の大まかな位置を［頁数］という形式で示した。また、本文中のイタリック表記および引用文中の大文字表記は傍点で示した。そして、注釈で触れる歴史上の人物の生没年は必要と判断した場合に限り示した。最後に、注釈で参照する近世の出版物はシャフツベリの蔵書から選び、例外についてはその都度に断ることとした[(3)]。

翻訳

［38］天に感謝を！　私たちの時代にもこれほどの実例があるのです。過ぎ去った時代の中にも同じような実例が数多くあります。私たちは、自分の行為に対する自由な糾弾どころか、最も意地の悪い誹謗中傷が面と向かってなされても、気にかけることなく耐えられた世の強大な君主を、さらには皇帝をも知っています。このような事例が異教徒には見つからなければ良かった、特にそのきっかけをもたらしたのがキリスト者でなければ良かったと思う人もおそらくはいることでしょう。確かに、それより前のローマ皇帝があのような暴政の怪物であり、宗教者のみならず、値打ちや徳があると怪しまれた全ての人に対して迫害を始めたことはキリスト者特有の不幸、いやむしろ人類一般の不幸でした。［39］

キリスト教にとって、ネロに迫害されることよりも大きな名誉や利益があり得たでしょうか？　一方で、この後にやって来たより善良な君主たちは、この過酷な方針を緩めるよう説得されました。もしかするとその治安判事も、かつては何千種類の礼拝様式が成立し、それまでその全てが社交的に共存していたというのに、自分の権力の神聖さを破壊するのみならず、自分も含めある特定の様式の礼拝に加わらない全ての人々を不信心で不敬虔で罰当たりな者として扱おうとする発想の新しさには仰天したかもしれません。しかし、迫害の刃を大きく鈍らせるというのが後を継いだ官吏たちの知恵であり、キリスト教なるセクトの最大の敵とみなされ、［40］自身もまたその中で教育されたことのあるかの君主でさえ、神殿と公立学校の再建以上は何も許さず、国家宗教に烙印を押したり、その公的礼拝を侮辱して手柄としたりする人がいても、その財産や人手には手をかけなかったのです[4]。

幸い、私たちの宗教には愛と人間性の精神が殉教の精神に勝ると確信させてくれる神聖な著者の権威があります[5]。そうでなければ、私たちから話したとしても、原始の頃にいた多数の証聖者や殉教者の歴史はおそらく顰蹙を買うことでしょう。コンスタンティノープルかどこかトルコ人の庇護下で暮らすからには、［41］モスク礼拝を乱すのがふさわしく似つかわしいと考え出すような良きキリスト者も（これが本当に良きキリスト者の印だとすればですが）、今の世の中にはほとんどいなくなりました。そして閣下、あなたや私のような良きプロテスタントであれば、ローマの偶像崇拝への憎しみのために（ミサが法によって設けられているところで）高尚なミサの最中に司祭を大声で妨害し、聖像や聖遺物を罵倒するような者などはほとんど浅ましい熱狂者と変わらないと思うことでしょう。

どうやら、私たちの良き兄弟たちであるフランスのプロテスタントの中にも、近頃私たちの許へやってきたのですが、この原始の頃のやり方に強く囚われてい

る者たちがいるようです[6]。驚くことに、この者たちはその祖国で殉教の精神を実行に移している上に、もし私たちが許可してくれるなら、つまり、もし私たちがその願いを聞き入れて絞首刑ないし投獄を課してくれるなら、［42］もし私たちがこの者たちの祖国の流儀に従い、親切にもその骨を砕き、迫害の残り火を掻き起してくれるなら、ここでも殉教を試みたいと望んでいるのです。しかし、私たちからこの者たちがそのような恩恵を授かることはあり得ません。私たちは心を頑なにされてしまっているので、あちらの野次馬たちが街頭のあちこちでこの者たちに親切な殴打を贈り、石を投げてくれるとしても、また祖国の司祭が喜んでこの者たちのためにお望みの懲罰を与え、試みの火を本気で灯してくれるとしても、こちらの国の主人である私たちイングランド人は、この熱狂者たちがそのようにあしらわれるのを許してはおかないでしょう。その不死鳥なるセクトが炎の中より立ち上がり、種がまさに殉教者の血から来たと言われる古い教会と同じ広まり方で新しい教会へと成長していくのを見ても、私たちなら、妬みからそのような行為に走るはずがありません[7]。［43］とはいえ、寛容なる私たちイングランド人は、何と野蛮なのでしょう、異教的な残忍さを何と上回っていることでしょう！　私たちは迫害という名誉を認めないだけでは飽き足らず、この預言する熱狂者たちをこの世で最も残忍な軽蔑に引き渡してしまったのです。私は、今度この者たちがバーソロミュー市の痛烈な道化芝居か人形芝居の題材にされるということをはっきり聞いています[8]。間違いなく、熱狂者たちの奇声や非随意的な興奮は、針金に操られた動きとパイプで吹き込まれる霊感によって上手に演じられることでしょう。というのも、預言状態にある預言者たちの身体は、（当人たち曰く）その力の及ばないただの受動的な器官になり、外からの力によって行動させられ、その音声や運動のどれを取っても自然なところ、本物の生命と似通ったところが無くなっているのですから、人形芝居がどんなにぎこちなく模倣しても、その芝居はきっとこの激情を実物そっくりに表現するはずです。［44］そして、バーソロミュー市がこうした特権を有するのであれば、どうあっても熱狂者のセクトや新手の預言売りや奇跡売りが国教会の機先を制したり、あるいは

力比べをしてこれを煩わせたりすることが無いように、私も思い切って自分たちの国教会の保護を引き受けましょう。

私たちにとっては幸いなことに、法王教が支配していた頃のスミスフィールドはより悲劇的な使われ方をしていました[9]。私たちの最初の改革者たちには熱狂者とほとんど変わらない者が多くいた恐れがありますし、私たちがあの霊的圧政を脱ぎ捨てるためにこの種の熱心さがどれほどの助けになったかということもただ神の知るところであります。そのため、あの司祭たちも普段のように、他の全ての情念よりも血への愛を選ばずにいたなら、私たちの全力の改革精神をより陽気なやり方でかわしていたかもしれません。［45］創始期のキリスト教を抑圧しようという邪悪な企てにおいて、異教徒たちが利口にもあのバーソロミュー市の方法を用いたというのは耳にしたことがありません。しかし、もしも福音の真理がどうにか打ち勝てるものであり、この者たちが私たちの原始の創始者たちを熊皮やピッチ樽よりも愉快な舞台に乗せることを選んでいたなら、まだその真理を沈黙させる見込みもあったでしょう[10]。

あのユダヤ人たちはもともと非常に暗い人々であり、何事においても冗談にはほとんど我慢ができず、まして宗教の教義や意見に属することであれば尚更そうでした。宗教は陰気な眼差しを向けられており、新たな啓示を用意すると見えるものにこの者たちが施してやれた唯一の治療法は絞首刑だったのです。［46］支配的な議論と言えば、「十字架へ、十字架へ」です。しかし、つい考えてしまうのですが、もしもユダヤ人たちが、私たちの救い主と彼に続いた使徒たちへの敵意と執念の全てをかけて、法王教徒が救い主への敬意を込めてこの頃上演しているような人形芝居を、彼を軽蔑して上演するつもりにさえなっていたなら、この者たちはその他の過酷なやり方の全てに勝る害を私たちの宗教に与えていたことでしょう。

私たちの偉大な学識ある使徒にとって、アテナイの反対者たちの寛いだ待遇は、迫害の最も激しかったユダヤの都市の険悪で呪うべき精神よりも不利なものだったと私は信じています[11]。彼にとっては、ローマの裁判官たちの公正さと礼節も、シナゴーグの熱心さや自国の司祭たちの熱烈さより利用しづらいものだったのです。とはいえ、この使徒が機知豊かなアテナイ人たちや、［47］身分ある男女の臨席するローマの法廷の前に姿を現したということを考え、彼がこうしたより礼儀を備えた人々の理解や気質にいかに堂々と応じていたかを見てみると、彼が機知ないし明朗さの道を拒むどころか、自分の主義を疑うことなくその審査に委ね、これを突きつけられる全ての笑いの鋭さで試そうとしていることがわかります。

ただし、ユダヤ人たちが私たちの救い主やその使徒に向かってこのように機知や悪意を試すことを決して好まなかった一方で、より非宗教的な方の異教徒たちは随分と前から、自分たちの間に現れた人々の最高の教説や最高の性格に対してこれを試してきたのです。しかも、これは最終的に、［48］この審査を経て堅固で正当だと認められた性格や教説にとって、侵害になるどころか反対に最高の利益となることがわかったのです。この異教世界に現れた中で最も神的な人物も機知の頂点の時代にあって、詩人たちの中で最も機知に富んだ人物から、意図的に執筆され上演されたある喜劇全体を通して最も酷く笑いものにされたのです[12]。しかし、これは彼の評判を貶めたり、その哲学を抑圧したりするには遠く及ばず、そのために彼の評判と哲学の両方がさらに勢いを増し、彼は他の教師たちからもさらに妬みを買うことになったのです。彼は笑われることに甘んじたのみならず、この詩人を可能な限り助けてやろうとしたのか、劇場に公然と足を運び、（決して有利なものではない）自分の実際の姿をその代理として機知に富んだ詩人が舞台に乗せたものと比べられるようにしたのです[13]。これこそ彼の明朗さだったのです。［49］この人の無敵の善良さの証言として、あるいはその性格にも意見にも欺瞞がないことの論証として、世にこれ以上偉大なものはありませ

ん。というのも、欺瞞は真面目な敵を恐れないものですから。欺瞞は厳しい攻撃が自分にとって左程危険ではないと知っているのです。明朗さほど欺瞞が毛嫌いし恐れをなすものはありません。

要するに閣下、私の理解する限り、宗教の憂鬱な扱い方は宗教を大変悲劇的なものとする扱い方であり、宗教が世にも惨憺たる悲劇を上演する契機なのです。そして私の考えは、宗教を良い作法で扱うのであれば、私たちが頼る明朗さ、そして宗教を吟味する自由と親しみはいくらあっても良いというものです。なぜなら、もしその宗教が真正かつ誠実なものなら、それはこの検査に耐え抜くのみならず、そこから利を得て栄えることになり、［50］もし疑わしいもの、あるいは何か欺瞞の混ざったものであるなら、見つかり暴かれることになるからです。

私たちが宗教を教わってきた憂鬱なやり方は、宗教を明朗に考えにくくしています。私たちが宗教に頼るのも、主に逆境に遭ったとき、もしくは、健康不良、精神の苦しみや煩い、気質の乱れに遭ったときです[14]。しかし実際のところ、こうした暗いときほど宗教について思考するのにふさわしくないときはないのです。自分自身を覗き込み、その精神や情念の気質を穏やかに吟味できる状態にないときは、自分を超えたものについて観想するのにふさわしくありません。というのも、私たちが神のうちに激昂や憤怒、復讐心や脅威を見るのは、自分が煩いや恐れで心中を満たし、苦難や不安によって、［51］気質の自然な穏やかさや寛ぎを大きく損なっているときなのです。

真の善良さが何であるのか、そして私たちがこれほどの喝采と栄誉をもって神に帰している属性が何を含んでいるのかを理解するためには、普通の明朗さどころか、最高の明朗さ、そして自分の人生の中で最も甘く優しい状態の中にいなくてはなりません。そうすれば、私たちが俗な仕方で神に想定する正義の形態、処罰の分量、憤りの性質、怒気や義憤の程度が、同じ神なる存在ないしその下にあ

る自然が私たちに植え付け、神にいかなる称賛や栄誉を捧げるにも必然的に前提しなくてはならないこの善良さという本来の観念に合うものかどうかを、最も良く見ることができるのです。［52］閣下、神のうちには神のようなものしかなく、また神は全く善良でないか真実かつ完全に善良であるかのいずれかだということを覚えておくこと、これは全ての迷信に対する防備になります。ただし私たちは、まさに「現実に神はいるのか、それともいないのか」という問いに対してであろうと、自分の理性を自由に用いることを恐れている限り、実は神を悪しきもの、善良さや偉大さと言われる性格と真っ向から対立するものと想定しているのであり、この探求の自由に際して、神の気質に対するそうした不信を露わにし、神の怒りや憤りを恐れることになるのです。

私たちの聖なる著者たちの一人はこの自由の注目すべき実例となっています。ヨブについて言われているような辛抱強さをもってしても、ヨブが神に対し全く遠慮せず、その摂理を手厳しく難詰しているということについては拒否せずにはいられません[15]。真実、彼の友人たちも、ヨブに強く懇願しながら正誤を問わずあらゆる議論を用い、諸々の反論を繕い、［53］摂理の事柄を互角の足場に据えようとしました。友人たちは理性を酷使しながら、また時として理性を遥かに超えながら、神について語り得る善さを全て語ることの価値を説いたのです[16]。しかしヨブの意見では、これは神に迎合することであり、神を依怙贔屓することであり[17]、神を馬鹿にすることでもあったのです[18]。不思議もありません。というのも、浅薄虚弱な根拠から神やその摂理を信じることにどんな価値があるのでしょう？　物事の外観と反する意見を信じ込むことや、その意見に反して言われることに全く耳を貸さないよう心を決めることにどんな美徳があるのでしょう？　その真実の神は素晴らしい性格をしていますね！　私たちが自分のうちにあるだけの知性に嘘をつくことを拒むならその気に障り、［54］何を持ちだしても反対の証明や証拠にできてしまうからには、世界最大の虚偽なのかもしれないことをでたらめに信じるならその意に適うというのですから！[19]

神が存在しなければ良いと願うことは、正しく理解されるなら、公共的な善が存在しなければ良いと、さらには自己の私的な善すらも存在しなければ良いと願うことでありますから、気立ての歪んだ人間にしかあり得ないことです。しかし、このような悪意から自分の信念を押し殺すようなことが全くない人であっても、どんな思弁の事柄にせよ、自分の理性の公平な使用が自分を来世での危機に陥れ得るとか、自分の理性の卑しい否定、そして自分の知性からすれば苦しいところしかない信念への執着が次の世において寵愛をもたらすなどと想像しているとしたら、その人はきっと神について不幸な意見を抱き、自分が善良であると知っている神を全くそうでないものと考えることになるはずです。[55] これは、宗教において追従者になるということ、信心深さに身を寄せるただの食客になるということです。これは、神と接するにあたって、まるでずる賢い物乞いがその地位もわからずに呼びかけた相手と接するようにするということなのです。物乞いの初心者たちは無邪気にも「善良な旦那！」「善良なお方！」と呼びかけるかもしれません。一方、老練の経験者となると、乗合馬車で出会った相手が誰であろうと、いつも「善良なる殿方様！」「善良なる閣下！」「善良なる貴婦人様！」なのです。なぜならこの場合、実際に一人でも閣下がいらっしゃるなら、（彼ら曰く）その称号に触れ忘れると何にもなりませんし、もしその集まりに一人として閣下がいらっしゃらずとも、害にはならず、悪くとられることもないのです[20]。

そしてこれは宗教でも同じなのです。私たちはどうすれば正しく物乞いをできるかを大変気にしていて、相手の称号を言い当てること、良い読みをすることに全てがかかっていると思っているのです。[56]「もし事の果てに何も無くとも、そのように欺かれることに害はないが、もし何かあるとしたら、十分に信じていなかった者にとっては致命的なことになるのだから、信仰に励み、出来る限り信じるべきである」というのは、幾度も主張され、幾人もの優れた人々の大公理となっていますが、想像しうる限り物乞いじみた逃げ口上です[21]。一方で、この人たちは余りに深く誤解しており、このような考えを抱きながら、この世での満

足や幸福に至るほど信じることも、また次の世で気に入られる上で有利なように信じることも全くできないでいるのです。というのも、このいかさまを知る私たちの理性は、この深みに満足し尽くして休らうどころか、たびたび私たちを押し流して疑いと惑いの海の中で振り回すことでしょうし、［57］加えて、自分の信念がこうした神についての有害な考えに基礎づけられている限り、私たちは実のところ自分の宗教の中でより悪く育まれ、至高の神についてもより悪い意見を抱かざるを得ないでしょう。

自分の能力の及ぶ限り公共を愛し、普遍的な善を研究し、全世界にとっての利益を追求するということは、実に善良さの極みであり、私たちが「神のような」と呼んでいる気質を形作るものです。閣下（というのもあなたはこのことをよくご存知ですから）、この気質にあるときに、他人が自分の手本の誠実さに説得されて自分と共にいてくれるよう願うことは自然なことです。また、自分の価値が知られるように願うことも自然であり、とりわけ私たちが善良な行政官として、あるいは君主ないし国父として国に奉仕し、自分の保護下にある人間たちの大部分を幸福にするという巡り合わせにあるときにはなおさらです。［58］一方、この集団の中に、辺境の地域で無知に育ったために私たちの名前や活動を耳にすることがなかったり、これを耳にしても、私たちについて食い違う変な話をあちこちで聞かされて困惑し、どう考えるべきかも、また私たちのような人物がこの世に実在するのかもわからなくなっていたりする人がいるということになったとして、真実のところ、私たちがこれに腹を立てるのはおかしなことではありませんか？　もしこの問題を冗談の中で扱う代わりに、その田舎じみた無知や悪い判断力、疑い深さから私たちの聞こえを損なった腹立たしい当事者たちに復讐することを本気で考えるとしたら、私たちは異常に気難しく陰険な者として通るのではないでしょうか？

［59］それならどう言いましょう？　このことをこのように気にかけるのは本

当に称賛に値することでしょうか？　善を栄誉のためにすることはそれほど神のようなことでしょうか？　あるいは、栄誉がないと考えられるところであっても、また恩知らずな人々や自分が受け取る善を全く気づかない人々のためであっても善をなすという方が神のようなことではないでしょうか？　私たちの中ではこれほど神のようなことが神という存在の中でその性格を失うとはどうしたことでしょうか？　それとも神は、私たちに表象されるがままに、私たちの自然本性の高邁で雄々しく神のような部分よりもその弱く女々しく無力な部分に似ているべきなのでしょうか？

私たち自身の弱さをひと目で悟り、人間の脆さという私たちには馴染みの深い特徴を見分けるということを、全く大変なことではないと思う人もいるでしょう。［60］憤慨や怒気、怒りや復讐心、名誉か権力についての嫉妬、名声や栄誉などへの愛といったものが有限な存在だけに属して、完全かつ普遍的な存在では必然的に余地の無いものであるということが簡単に理解できると思う人もいるでしょう。一方、道徳的に卓越しているものという認識が定着していないならば、あるいは、そのようなもの以外は神のうちに居場所を持ち得ないと告げる理性が信用できないならば、私たちは神について他人が語ることも、神ご自身が啓示なさることも信用できなくなるでしょう。まず確かにしなくてはならないのは、神が善良であって私たちを欺かないということなのです。そうでなければ、本当の宗教的な信仰ないし確信など全くあり得ないでしょう。［61］さて、啓示に先立つもの、理性の事前論証なるものが実際にあり、神がいるということ、それから神が私たちを欺かないような善良さを備えていることを納得させてくれるのなら、善良さでは私たちの中でまさに一番という者を超えるほどに神が善良であることも、私たちが信用する限りこの同じ理性が証明してくれるでしょう。私たちを怯えさせ得るものはただ悪意であって善良さではないのですから、こうすることで私たちを不安にさせる恐ろしさや疑わしさは一切なくなることでしょう。

変わった仕方であるとはいえ、使える人にとっては精神の特定の気質不全に大変効き目のある推論がありまして、それは次のようなものです[22]。「利害が対立するところにしか悪意はあり得ない。普遍的な存在には利害の対立があり得ず、それゆえに悪意もあり得ない。」一般的精神というものが存在するなら、それには個別の利害があり得ません。［62］一方、一般的善ないし全体にとっての善とこの精神自身の私的善は必ず同じ一つのものであるはずです。一般的精神はこれ以外のことを意図したり、この他のことを目指したり、これと対立することへ駆り立てられたりすることがないのです。ですから、私たちが考えなくてはならないのは、全体と関わりを持つ精神というものが存在するのかどうか、ということだけなのです。というのも、精神が存在しないならば、それでも自然に悪意はないのだという慰めがあるでしょうし、精神が本当に存在するならば、それがこの世で最も善良な本性の精神であると信じていられるでしょう。このうち後者の方が最も快適であり、共通の親という考えの方が孤児の自然や父無き世界といった考えよりも恐ろしくないと考える人もいることでしょう。しかし、宗教が私たちの間に成り立ってこの方、善良でありながらも、そのように公言されたなら恐れずに済んだであろう人々、偶然のみを信じればよいことが確かであったなら、おそらく心がより安らかだったであろう人々は数多くいるのです。［63］なぜなら、人は誰しも、神はいないのではないかと考えて慄くのではなく、むしろ神がいるのではないかと考えて慄くからです。しかし、人間を考えるような優しさで神が考えられていたならこれも違っていたでしょうし、私たちは情念の欠陥、また卑しさや不完全性といったものを自分のうちに認め、それを乗り越えるために善人として出来る限りの努力をし、そして日々成長するにつれ克服してゆくことを知る一方で、神にはこのような欠陥がなく、最高の善良さが必然的に属しているはずだと納得して信じていられたことでしょう[23]。

私が思いますに、閣下、私たちにとっては、神というより高い領域に上昇する前に、自分たちの方へ少しばかり下降してやり、平明で立派な道徳についてささ

やかな思考を割くのが良いのでしょう。[64] 一度自分自身を覗き込み、自分の感情の本性をよく識別してしまえば、おそらく私たちはある性格の神らしさについてより相応しい判定人となり、完全な存在にはどの感情が似合い、どの感情が似合わないかをより良く見分けるようになるでしょう。私たちが愛し方や称え方を理解するのは、称えるべきものや愛すべきものについてある一貫した認識に至ってからなのかもしれません。それからでなければ、神に最大の名誉を捧げるつもりが、最小の名誉を捧げることになってしまうのかもしれません。というのも、自分の種族の中で称賛の価値があるものや卓越したものを見分けられない生き物から称えられたところで、神にどんな名誉があり得るのか想像し難いものですから。

音楽を解する耳を持たない人々の集まりから天に届くような大喝采を受けたなら音楽家はきっと赤面するでしょうし、[65] この聴衆がこの音楽家についてもっとしっかりした理解を獲得し、自分たちの感覚によってその演奏から本当に良いものを見つけ出せるようになるまでは、その厚意をにこやかに受け取ることはほとんどできないでしょう。そうなるまで、こうした場に栄誉はほとんど無く、いくら見栄を張っても、その音楽家には満足する理由がほとんどないのです。

何より称賛を好む人にしても、見当違いに褒められるよりは顧みられない方がましでしょう。最も利害に囚われずに善をなすと言われるような人ならば、無暗に称えられたがっているとみなされたり、無知な表彰や無理な喝采といった下らない安物を高く見積もっていると思われたりすることがどうしたら起こるのか私にはわかりません。

[66] 善良さというものは、自分が大変良く理解しても身に着かないような他の性質とは訳が違います。私たちは何一つ演奏ができないとしても、音楽を解す

る卓越した耳を持つことができます。私たちは詩人にならずとも、あるいは少しも詩人肌でなくとも、詩を良く判定することができます。しかし、私たちはそれなりに善良であることなしには、善良さについてそれなりの認識を抱くことはできません。それゆえ、神という存在への称賛がその礼拝の大切な部分であるなら、称えるために学べることが他にないのなら、私が思いますに、私たちは善良さを学ぶべきなのです。なぜなら、不健全で虚ろな心による善良さへの称賛というものは、この世で最大の不協和音を確実に生むはずですから。

［67］閣下、自分自身を覗き込むというこの平明な自家編みの哲学が、私たちの宗教上の誤りを正すのに素晴らしく役立つ理由は他にもあります。というのも、人伝いの熱狂と言えるものがあるからです。自分の内での動揺も無ければ自分を惑わせるパニックも無い人々であっても、よく他人の証言に騙されては、軽率にも数々の偽物の奇跡を信じさせられてしまうのです。こうした人々はこの習性のために信仰が大変一貫せず、どんな教説の風にもすぐさらわれ、成り上がりのどんなセクトないし迷信にも盲従するようになります。一方、自分の情念をまさに種において知ること、熱狂の成長と発達をよく測ること、熱狂の自然な力について、また熱狂がまさに私たちの感覚をどのように支配するかについて正しく判断することは、［68］道徳的確実性や事実の事柄といったまことしやかな口実で武装した妄想にもっと上手く対抗する術を教えてくれるでしょう[24]。

先に言及した新手の預言セクトは、どうやら他の数ある奇跡の中でも断然際立つ奇跡を授かったと主張しているようですが、これは何百もの人々の前で計画的かつ警告を伴ってなされたらしく、この人々も実際この奇跡の真実性に証言をしているのです[25]。一方、私はただ尋ねたいのですが、このセクトに属したこともその道に盲従したこともないのにこの数百人と同じ証言をする人物が一人でもいたでしょうか？　私は、その人物がこの特定の熱狂から全く自由だったかどうかを尋ねるだけではなく、憂鬱から全く自由であるくらいの健全な判断力と明晰

な頭脳の持ち主なのかどうか、［69］どう見込んでも他の一切の熱狂にもかかり得ないのかどうか、ということも尋ねなければ決して満足しないでしょう。なぜなら、そうでなければパニックにかかり、感覚の証拠は夢のことのように消え去り、想像は判断力と理性を塵も残さず一瞬で焼き尽くすくらいに燃え上がっていたのかもしれないからです。心中には可燃物が存在し、とりわけあのような霊気に掴まれた群衆ならば、火花一つでたちまち火がつくようになっているのです。無数の眼が激情に爛々と光り、息を荒げた胸が霊感に喘ぐときには、また人の表情のみならず呼吸や発散までもが伝染性のものとなり、霊感をもたらす病が不感蒸泄によって広まっていくときには、突如として火災が起こっても不思議ではありません[26]。私は、古代の預言者たちの間で流行し、［70］不敬なサウルですら憑かれたとされる霊気がどのようなものであったか答えられるような優れた神学者ではありません[27]。私が聖書から学んでいるのは、預言の霊気には悪いものも良いものもあるということです。また、私が現代の経験と聖俗の歴史全体を通して知っているのは、身体器官に対しては、この霊気の作用がどこでも同じだということです。

近頃、復活した預言を弁護するために筆を執り、以来自らも預言めいた陶酔に陥ってしまったあるジェントルマンは、古代の預言者たちは、狂人（ないし熱狂者）と呼ばれるような見慣れない様々な身振りをしながら、陶酔の最中でその身に神の霊気を授かっていたと語っており、それもバラム、サウル、ダヴィデ、エゼキエル、ダニエルといった実例から明白に伺えると言っています[28]。さらに進むと、彼はこのことを使徒時代の実践によって、それから、［71］キリスト教が始めに起こり広がっていった頃の原始教会ではありふれた普通のことであった（と私たちの著者が主張している）一見無規制な賜物に対し、使徒自身が課した規制によって正当化しています[29]。しかし、懸命に自分の道と使徒の道の類似をこしらえることは彼に任せておきましょう。私が知るのはただ、彼が描写しながら、自分でも患っている（哀れなジェントルマン！）あの症状が、もしかする

と彼にはキリスト教的だと主張し得るものかもしれませんが、それに劣らず異教的だということです。それに、私は彼が近頃（巷で言うところの）興奮の下で、その陶酔が無くては全くできないらしいご立派なラテン語様式の預言を告げるのを見かけましたが、これは私の心にかのラテン詩人によるシビュラの描写をよぎらせたのであり、その煩悶はまさしくこのようなものでした。[72]

——不意に、表情も顔色も定まらなくなり
髪も纏まりを保たず、さらに胸も息を荒げ
猛る心臓も激情に膨らみ、姿も巨体となり
声も死すべき者ではない。息吹かれたのだ
今や近くにある神意に。——

ウェルギリウス『アエネイス』第6巻[30]。

まだこの後にもあります。

——洞窟の中では、異形の
預言者が、大いなる神を振り落とせたらと
乱れ狂うが、神はそれを凌ぎ、泡吹く口を
萎えさせ、猛る心臓を宥め、押さえ馴らす[31]。

これこそまさに、私たちの熟練した著者の様式なのです。[73]「というのも霊感を受けた者は、（彼曰く）通常なら宣託に先立つ一、二ヶ月の間、霊気が再三に渡る興奮を通して器官を形作る修練の期間を経験するのである。」

あるローマ人の歴史家は当時よりも遥か以前にローマで勃発した極めて酷い熱狂について語っており、こうした預言の霊気について、「心を掴まれたかのごとく、狂信の身振りで預言する男たち（リウィウス、第34巻[32]）」と描写していま

す。その後に続いた呪うべきことを書き写すのは気が進みませんが、一方で、この忌まわしい事件にあって元老院が下した穏当な布告は私にとって写し忘れ難いものであり、閣下も以前に読まれたことがあるかもしれませんが、何度でも感嘆しながら読み返していただけるものと確信しております。「（リウィウスによると）元老院の協議を以て制定する、自今は云々。もしもこの種の神事に伝統と必要があり、憂惧や罪悪を伴わずには当該の神事を怠り得ないと考える者がいたならば、当人は首都法務官に申告し、また当法務官は元老院と協議するものとする。［74］元老院が百人に満たない場合を除いて、もしも申告者に対する許可が与えられたならば、当該の神事は以下の通りに実行されるものとする。儀式への参加は五名を超えず、共有財を設けず、神官ないし僧侶を設けないこと。[33]」

この熱狂という気質不全には譲歩することが必要であり、自らの哲学の総力を挙げて迷信に抗ったあの哲学者でさえ幻視の空想には居場所を残しており、熱狂に対して間接的には寛容だったのです。エピクロスのような宗教的信仰の少ない者に、宙に浮かぶ軍勢と城塞の話やそうした幻視の現象を信じるような俗人めいた軽率さがあったとは想像し難いです。とはいえ、彼はこうした幻視を認めた上で、それをエフルウィアや空中の鏡、その他はわかりませんがこうした材料によって解明しようと考えており、［75］いずれにせよ彼に与するラテン詩人もそれを例のごとく美しく飾り立てているのです。

————物体の形象は漂っていく
数多く、多くの仕方で、余すところ無く隅から隅まで。
その像は薄くて、空気中では互いにたやすく接合する
行き当たることさえあれば、蜘蛛の糸や金箔のように。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

このようにして、ケンタウルスが、スキュラの肢体が、

ケルベロスの風貌をした犬が私たちに見えてくるのだ、
さらには死して地に骨を埋めた者たちの像までもが。
それもあらゆる種類の像が随所へ運ばれていくからだ
一部は空気そのものの中に自ずと発生したものであり
一部は様々な物体から何かしら分離したものである。

ルクレティウス、第4巻[34]。

［76］これこそ、この哲学者が人間の自然本性には幻視の霊気の宝庫があると信じていた印です。人々に幻を見る傾向があると確信していたために、彼は人々が幻無しでやっていくことよりも、幻をその手に委ねる方を選んだのです。宗教の原理を自然なものとは認めなかったにもかかわらず、彼は暗黙のうちに、人間には超自然的な対象を目指す驚くべき性向があるということ、それから、その対象の観念は、たとえ実が無くともある仕方では生得的なもの、すなわち、実際に生まれついているためにどんな手によってもほとんど避けられないものだということを認めざるを得ませんでした。私が思いますに、この譲歩のために、神学者なら宗教の有用性はもちろん真実性についても彼に優れた反論ができるようになるでしょう。しかしそれはそうとして、［77］幻視に襲われた人物は、現れの中身が真実であろうと虚偽であろうと、その症状が同じであり、その情念も等しい力を持ちます。ラテン人にとってのリンパ憑きとは、ギリシア人にとってのニュンフ憑きのことでした。これは、田園神やニュンフといった類の神と出会い、その神によって自分の理性を打ち倒すような忘我に投げ込まれたと言われる人物のことです。その陶酔は身震いや慄き、頭や手足の振り、興奮、（リウィウスが呼ぶところの）狂信の身振りないし痙攣、即興の祈祷、預言、吟唱などを通して外面に表れます。どの国にも何かしらの種類のリンパ憑きが存在するのであり、（キリスト教でも異教でも）教会はみな狂信に閉口してきたのです。

自分たちが恐水病と呼ぶ病にこの病が何か関係を持っているという古代人の想

像があったと考える人もいるでしょう[35]。［78］自分の気質不全からくる憤怒を噛み付いて伝達させるような点が古代のリンパ憑きにあったのかということについて、余り積極的に答えることはできません。一方で、歯の欲求の伝達力に極めて恵まれた狂信者たちは古代人たちの時代から存在しています。というのも、食らいつく精神が宗教の中に初めて身を起こして以来、全てのセクトがこれにかかり、世に言う通り「歯爪を尽くして[36]」きたのであり、お互いを容赦なく噛み付き回すことを何よりも楽しんでいるのですから。

実は、罪のない種類の狂信も随分と広まっており、当事者がその現れに襲われると常に、それを分け与えて他人の胸中に同じ炎を灯してやりたいというむず痒さが生じるのです。というのも、例えば詩人たちもまた狂信者なのですから。ホラティウスもこうして、リンパ憑きなのか、それを装っているのか、［79］ニュンフやバッカスの幻視がその身に及ぼした効果を描いているのです。

私は遠くの岩々の間にバッカスを見たのだ、
歌を教えているのを、信じてくれ、後世よ、
学んでいたのはニュンフたち——
エウオイ！　心は近頃の懸念に怯えていたが
胸がバッカスに満たされると、乱れ狂って
リュンパに憑かれる——

ハインシウスの読解による『オード』第2巻第19歌[37]。

（始めに思い切って閣下へ申しましたように）私たちが話しているこの激情をある程度でも生み出すような神の存在感の想像や仮想を抜きにして、自己流で偉大なことをなせる詩人はいません。かの冷静なルクレティウスでさえ、霊感への反論を著す際にはその霊感を利用しており、［80］自然を貶め、自然から見た目の英知と神々しさを剥ぎ取ろうとする当の著作の中でも、自らを励まし導いてい

くために、自然の現れを神々しい姿で呼び起こさざるを得なかったのです。

養いのウェヌスよ、天空を滑りゆく星座たちの下で
あなたは船を運ぶ大海に、そして実り豊かな大地に
命を溢れさせる——
ひとり、あなただけが事物の本性の舵を取っていて、
あなたがいなければ、この神々しき光景には何者も
現れず、喜ばしさも愛らしさも生まれることがない。
そこであなたには、韻律を綴る仲間となって欲しい
私はこの手でこの韻律に事物の本性を記したいのだ
私たちの友メンミウスのために——

ルクレティウス、第1巻[38]。

この全てから私がただ一つ推理したいのは、熱狂とは驚くほど力強くかつ広きに渡るものだということ、［81］無神論でさえもこれを免れないのですから、熱狂が精妙な判断の事柄であって、十分かつ判明に知ることがこの世で最も難しいものだということです。というのも、ある方々がしっかりと指摘したように、熱狂的な無神論者というのもいるのです[39]。また、外面的な目印では、神の霊感を熱狂から簡単には区別することができません。なぜなら、霊感とは神の存在の本物の感触のことであり、熱狂とは偽物の感触のことなのですから。一方で、それらが生み出す情念も非常によく似ています。なぜなら、精神が幻視に触れ、ある本物の対象、それか単なる神についての幻覚に視線を注ぐとき、また、精神が途方もない、人を超えたものを見ている、あるいは見ていると思っているとき、精神の戦慄、歓喜、混乱、恐怖、感嘆、あるいは何であれ精神に属する激情、ないしこのような状況で真っ先に起こる激情には、広大で計り知れず、（画家たち曰く）生を超えたところがあるのです。そしてこれこそが「狂信」という名称を生み出したものであり、［82］この名称は古代人たちによって、心を奪う現れと

いう本来の意味で用いられたのです[40]。

受け取られた観念や像が人間の窮屈な器に収まらないほど大きいならば、異常かつ猛烈な何かが生じるものです。それならば、熱狂という単語そのものも神の存在感を意味していますし、最初期の教父たちが神のようだとみなした哲学者も、何であれ人間の激情の中にある崇高なものを表すためにこの単語を利用していたのですから、霊感も神的な熱狂と呼ばれて然るべきでしょう[41]。これは彼が英雄や為政者、詩人、弁論家、音楽家、さらには自分たち哲学者にも認めていた霊気なのです。私たちも、何であれこのいずれかの道で偉大に成し遂げられたことは、自ずと高貴な熱狂のおかげとせずにはいられません。ということは、私たちはみな、この原理について何か知っているのです。［83］この原理を然るべき仕方で知り、自分でも他人でも、様々な種類の中で見分けていくこと、これは大仕事であり、またこれによってのみ私たちは妄想を回避する希望を持てるのです。というのも、これらの霊気が神によるものかどうかを判断するために、私たちは、自分の精神が理性と健全な感覚を備えているか、平穏冷静かつ公平であることで判断に一体ふさわしくなっているか、偏見を生む全ての情念、目を眩ませる全ての蒸気ないし憂鬱の毒気を免れているか、というようにまず自分の精神について判断しなければならないからです。自分自身を理解すること、自分がどんな精神にあるかを知ること、これこそ第一の知識、先決の判断です。その後なら、私たちも他人の精神について判断し、その人物の価値がどうであるかを考察し、その頭脳の丈夫さによってその証言の有効性を検査してもよいでしょう。そしてこれこそ、明朗さを保つことによって最も良く成し遂げられるだろうと、私があえて主張したものなのです。［84］というのも、そうでなければ治療そのものが病に姿を変えるかもしれないのですから。

さて今や、閣下、あなたも詰まるところある程度は熱狂というものを正当化し、この言葉を身につけてくださったことでしょうし、私がしてきたような仕方であ

なたに語りかけることで私が異常に見えてしまったとしても、あなたは私に衝動を弁解するお許しを下さるはずです。あなたは私のことをあなたの最も熱烈な友と思って下さらなくてはなりませんし（真実あなたはそうして下さるでしょう）、このように差し出がましい熱情があるときだけを例外として、あなたの熱狂的な友人は他でもなく最高の敬意を表しているのですから、他の場面でも自然に備えていらっしゃるその優しさでもって、これを寛容に扱って下さらなくてはならないのです。

閣下へ

閣下の極めて忠実で

極めて従順な

慎ましき僕より

（完）

注

（1） [The 3rd Earl of Shaftesbury], *A Letter concerning Enthusiasm to My Lord* ***** (London, 1708).

（2） 前半部の翻訳および解説は菅谷基「第三代シャフツベリ伯爵『熱狂に関する書簡』和訳と解説（上）——1708年版の始めから38頁まで」、『ICU 比較文化』48号（ICU 比較文化研究会、2016年）、63-98頁を参照せよ。

（3） この方針はあくまで『熱狂書簡』と他の文献の関係を理解しやすくするためであり、蔵書以外の文献への言及を妨げるものではない。シャフツベリの蔵書についてはシャフツベリ・プロジェクトのウェブサイトに公開されている一覧を参照した（“Reading Room.” *The Shaftesbury Project*, http://www.dozenten.anglistik.phil.uni-erlangen.de/shaftesbury/readingroom.html.）。

（4） 「かの君主」はユリアヌス帝（Flavius Claudius Julianus, 331-363）のことである。ユリアヌス帝はキリスト教の教育も受けた後に伝統宗教に転向し、伝統宗教の信徒による教育と閉鎖されていた神殿の復興を進めた。南川高志『ユリアヌス——逸脱のローマ皇帝』（山川出版社、2015年）、70-86頁を参照せよ。

（5） 1714年版に追加された注は「愛と人間性」（Love and Humanity）の典拠として「コリントの信徒への手紙第一」の13章3節を指示している。

（6） フランス預言派（French Prophets）のことである。フランス預言派については、Hillel Schwartz, *The History of a Millenarian Group in Eighteenth-Century England* (Berkeley, 1980), pp. 17-26, 72-125 ; Lionel Laborie, *Enlightening Enthusiasm : Prophecy and Religious Experience in Early Eighteenth-Century England* (Manchester, 2015), pp. 16-29, 43-46, 176-187を参照せよ。

（7） 「殉教者の血（the blood of the Martyrs）」が教会の種であるという表現は神学者テルトゥリアヌス（Quintus Septimius Flrens Tertullianus, c. 155- c. 220）が著した『護教論』（*Apologeticum*）の「殉教者の血は教会の種（Semen est sanguis Christianorum）」という一節に由来する。近世の他の用例としてEdward Stillingfleet, *Origines Sacrae, or, A Rational Account of the Grounds of Christian Faith* (London, 1662), p. 280-281を挙げておく。該当箇所の和訳については、テルトゥリアヌス（著）、鈴木一郎（訳）『護教論』、『キリスト教教父著作集　第14巻』（教文館、1987年）、117-118頁を参照せよ。

（8） バーソロミュー市は使徒バルトロマイを記念して、毎年8月末にスミスフィールドで開催された市である（*OED*. “Bartholomew, n.”）。ここで言及されている人形劇についてはGeorge Speaight, *The History of the English Puppet Theatre* (London, 1955), pp. 92-102 ; Scott Cutler Shershow, *Puppets and “Popular” Culture* (London, 1995), pp. 130-135 ; ガストン・バティ、ルネ・シャヴァンス（著）、二宮フサ（訳）『人形劇の歴史』（白水社、1960年）、58-61頁 ; 南隆太「人形劇の政治学――初期近代イギリスにおける娯楽」、佐々木和貴（編）『演劇都市はパンドラの匣を開けるか――初期近代イギリス表象文化アーカイヴ2』（ありな書房、2002年）、79-84頁を参照せよ。

（9） メアリ女王時代の処刑場であったということである。

（10） 「熊の皮」は「キリスト教徒をいたぶる拷問」として言及される（*OED*, “bearskin, n.” 1.b.）。「ピッチ樽」とはピッチ（松から蒸留された黒色の物質）の塗られた樽と考えられる。タキトゥス『年代記』の15巻44章には、ネロ帝によってキリスト教徒が野獣の皮を着せられ犬に噛み殺されたり、夜の灯火として燃やされたりしたという記述がある。タキトゥス（著）、国原吉之助（訳）『年代記（下）』（岩波書店、2004年）、270頁を参照せよ。

（11） 「偉大な学識ある使徒」はパウロのことである。

（12） 「最も神的な人物」はソクラテス、「最も機知に富んだ人物」はアリストパネス、「ある喜劇」は『雲』のことである。シャフツベリの『雲』理解の歴史的な位置づけについては、R. A. Anselment, “Socrates and The Clouds: Shaftesbury and A Socratic Tradition.” *Journal of the History of Ideas* Vol. 39, No. 2 (1978), pp. 171-182を参照せよ。

（13） この記述はアイリアノスの『様々な物語』（『奇談集』）に遡ることができる。近世にアイリアノスの記述を紹介した例としてThomas Stanley, *The History of Philosophy. The Third Part containing the Socratick Philosophers* (London, 1655), p. 32を挙げておく。また、アイリアノスの該当箇所については、アイリアノス（著）、松平千秋、中務哲郎（訳）『ギリシア奇談集』（岩波書店、2010年）、67-68頁を参照せよ。

（14） 原文での「主に（chiefly）」の重複は誤植と判断した。

（15） 「難詰する（take to task）」は「糾弾する」という意味で取った（*OED*. “task, v.” II.5）。

（16） 「価値を説く（make a merit of）」は「価値が認められるものとして説明ないし表現すること」という意味で取った（*OED*. “merit, n.” phrases.）。

（17） 「神を依怙贔屓する（accepting God’s person）」は「不適切な贔屓を示すこと」という意味で取った（*OED*. “accept, v.” 2）。

（18） 1714年版に追加された注は「ヨブ記」13章7-10節を指示している。

（19） 「でたらめに（at a venture）」は「運任せに」という意味で取った（*OED*. “venture, n.” I.1.c）。

（20） 「何にもならない（be undone）」は、「施しをされない」ないし「乞い方が至らない」という意味と解して意訳した。

（21） 「幾人もの優れた人々」として編集者クラインは、ジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）、ホワイト・ケネット（White Kennett, 1660-1728）、ジョン・ティロットソン（John Tillotson, 1630-1694）を挙げている。The 3rd Earl of Shaftesbury, *Characteristics of Men*, *Manners*, *Opinions*, *Times*, edited by Lawrence E. Klein (Cambridge, 1999), p. 19.

（22） 「効き目がある（sovereign）」は（治療法について）「著しく効果的な」という意味で取った（*OED*., “sovereign, n. and adj.” B.3.）。

（23） 1711年版に追加された注ではプルタルコス『モラリア』から「迷信について」170A が引かれている。和訳はプルタルコス（著）、瀬口昌久（訳）『モラリア2』（京都大学学術出版会、2001年）、272頁を参照せよ。

（24） 「道徳的確実性」（moral Certainty）は疑えないほどの高い蓋然性を意味し、論証的な確実性には及ばないとしても人間の実践の指針としては十分とされる（*OED*. “moral, adj.” 7.）。「事実の事柄」（Matter of Fact）は意見や推論と対比された事実の問題として問われる物事を意味する（*OED*. “matter of fact, n. and adj” A.1.a.）。

（25） 「際立つ奇跡」は、1703年にフランスでカミザールの預言者の一人が火の上に無傷で立ち続けた出来事を指す。Richard B. Wolf, “Shaftesbury’s “Signal” Miracle in *A Letter concerning Enthusiasm*.” *English Language Notes*, xvi (1978), 21-25.

（26） 「不感蒸泄（insensible Transpiration）」とは体外への排出のうち、皮膚から恒常的になされるもので、「汗（sweating）」として観察されることもある。シャフツベリの医学用語の典拠は今のところ不明である。シャフツベリは所有していないが、前稿に倣いトマス・ウィリス（Thomas Willis, 1621-1675）の医学書を参照すると、「特殊的で周期的な排出、あるいは異常な排出とは別に［...］一般的かつ恒常的な排出、すなわち不感蒸泄というものが起こっている」とある。Thomas Willis, *Pharmaceutice Rationalis : Or, the Operations of Medicines in Humane Bodies* (London, 1684), p. 31 in Dr. Willis’s Practice of Physick (London, 1684) を参照せよ。

（27） 1711年版に追加された注は「列王記」22章2節以降と「歴代誌第二」43章19節以降を指示している。

（28） この「ジェントルマン」はフランス預言派に属したイングランド人ジョン・レイシー（John Lacy, 1664-1730）であり、この箇所は彼がフランス預言派の出版物に付けた序文に依拠して書かれている。*An Old-spelling, Critical Edition of Shaftesbury's 'Letter Concerning Enthusiasm' and 'Sensus Communis: An Essay on the Freedom of Wit and Humour'*, edited by Richard B. Wolf (New York, 1988), pp. 121-122.

（29） 1714年版に追加された注は「コリントの信徒への手紙第一」14章を指示している。

（30） 6巻47-51行。既存の和訳は岡道夫（訳）『アエネーイス』（京都大学学術出版会、2012年）、244-245頁を参照せよ。

（31） 6巻77-80行。既存の和訳については、岡道夫（訳）『アエネーイス』、246頁を参照せよ。

（32） 39巻13章。Livy, *Qui Extant Historiarum Libri* (Cambridge, 1679), p. 1152.

（33） リウィウス『ローマ建国以来の歴史』39巻18章。Livy, *History of Rome, Volume XI : Books 38-39*. translated by Evan T. Sage, p. 270では solenne は sollemne となっているが、シャフツベリは Livy, *Qui Extant Historiarum Libri*, p. 1156などの読みに従ったと考えられる。

（34） 『事物の本性について』724-727および732-737行。既存の和訳は藤沢令夫（訳）『事物の本性について』、『世界古典文学全集　第21巻――ウェルギリウス、ルクレティウス』（1965年、筑摩書房）、369頁を参照せよ。

（35） トマス・ブラント（Thomas Blount, 1618-1679）の『語義注解』は「恐水病」（Hydrophoby）を「憂鬱質によってか狂犬に噛まれることによって引き起こされる、水およびあらゆる種類の液体に対する極度の恐れ」と定義している。Thomas Blount, "Hydrophoby (hydrophobia)." *Glossographia* (London, 1661).

（36） 「歯爪を尽くして」（Tooth and Nail）は「猛烈に／全力で」という意味の慣用句である（*OED*. "tooth, n." phrases, P 4.a.）。

（37） 1-3および5-7行。既存の日本語訳と注釈については、鈴木一郎（訳）『歌集』、『ホラティウス全集』（玉川大学出版部、2001年）、380、503頁を参照せよ。シャフツベリはホラティウスの詩集を20冊近く所有しており、そのうち1冊が人文学者ダニエル・ハインシウス（Daniel Heinsius, 1580-1655）が1612年に出版した作品集である。ここで「ハインシウスの読解」（Heinsius reads）と言われているのは、この一節の最後が「歓喜する」（Laetatur）ではなく「リュンパに憑かれる」（Lymphatur）とする読みのことである。しかし、ハインシウス版の当該箇所は「歓喜する」と取っているため、彼の読みとするここの記述は誤っている。Horatius, *Q. Horati Flacci Opera. cum Animaduersionibus & Notis Danielis Heinsi; longe auctioribus* (Leiden, 1612), p. 58を参照せよ。また、大文字表記による「ニュンフたち（Lymphas）」および「リュンパに憑かれる（Lymphatur）」の強調はシャフツベリによるものである。

（38） 『事物の本性について』1巻2-4および21-26行。既存の和訳は藤沢令夫（訳）『事物の本性について』、291頁を参照せよ。

（39） 「ある方々（some）」は、シャフツベリの『反省雑考集』の第2考から、哲学者ラル

フ・カドワース（Ralph Cudworth, 1617-1688）とヘンリー・モア（Henry More, 1614-1687）と判断できる。例えば、カドワースは理性的結論としてではなく、見たり感じたりできないものを信じまいという単なる不信心の結果として無神論者になった人々を「熱狂的あるいは狂信的な無神論者」とみなしている。モアは他の点において正常でありながら一点において狂っているという特徴において熱狂者と無神論者は「類する（parallel' d）」と述べている。[The 3rd Earl of Shaftesbury], *Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times*. vol. 3 (London, 1711), pp. 63-68 ; Ralph Cudworth, *The True Intellectual System of the Universe* (London, 1678), p. 134 ; Henry More, *Enthusiasmus Triumphatus ; Or, A Brief Discourse of the Nature, Causes, Kinds, and Cure of Enthusiasm* (London, 1662), p. 47, in *A Collection of Several Philosophical Writings of Dr Henry More* (London, 1662).

（40）「狂信（fanaticism）」が由来するラテン語（fanaticus）は「神の霊感を受けた／熱狂した」といった意味の語で、さらに「神殿／神域（fanum）」にまで遡る。

（41）「それ自体で神の存在感を意味している」とは「熱狂（enthusiasm）」が「神がかっている／神を内に抱く（entheos）」という古代ギリシア語の形を留めていることを指す。ここで「神のようだ（Divine）」と言われている哲学者はプラトンである。

参考文献

・『熱狂書簡』と参考にした他の版

[Shaftesbury, the 3rd Earl of]. *A Letter concerning Enthusiasm to My Lord* ***** (London, 1708).

[———]. *Lettre sur L'entousiasme. Traduite de l'Anglois* (La Haye, 1709).

[———]. *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, vol. 1 (London, 1711).

———. *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, vol. 1 (London, 1714).

———. *An Old-spelling, Critical Edition of Shaftesbury's 'Letter Concerning Enthusiasm' and 'Sensus Communis: An Essay on the Freedom of Wit and Humour'*, edited by Richard B. Wolf (New York, 1988).

———. *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, edited by Philip Ayres, vol. 1 (Oxford, 1999).

———. *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, edited by Lawrence E. Klein (Cambridge, 1999).

———. *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, edited by Douglas den Uyl, vol. 1 (indianapolis, 2002), http://oll.libertyfund.org/titles/811.

・二次文献

"Reading Room." *The Shaftesbury Project*, http://www.dozenten.anglistik.phil.uni-erlangen.

de/shaftesbury/readingroom.html. Accessed 30 September 2016.

Aldridge, A. O. "Shaftesbury and the Test of Truth," *Publications of the Modern Language Association*, Vol. 60, No. 1 (1945), pp. 129-156.

Anselment, R. A. "Socrates and The Clouds: Shaftesbury and A Socratic Tradition", *Journal of the History of Ideas* Vol. 39, No. 2 (1978), pp. 171-182.

Blount, Thomas. *Glossographia* (London, 1661).

Cudworth, Ralph. *The True Intellectual System of the Universe* (London, 1678)

Horatius. *Q. Horati Flacci Opera. cum Animaduersionibus & Notis Danielis Heinsi; longe auctioribus* (Leiden, 1612).

Laborie, Lionel. *Enlightening Enthusiasm : Prophecy and Religious Experience in Early Eighteenth-Century England* (Manchester, 2015).

Livy. *Qui Extant Historiarum Libri* (Cambridge, 1679).

More, Henry. *Enthusiasmus Triumphatus ; Or, A Brief Discourse of the Nature, Causes, Kinds, and Cure of Enthusiasm* (London, 1662), in *A Collection of Several Philosophical Writings of Dr Henry More* (London, 1662).

Schwartz, Hillel. *The History of a Millenarian Group in Eighteenth-Century England* (Berkeley, 1980).

[Shaftesbury, The 3rd Earl of]. *Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times*. vol. 3 (London, 1711).

Shershow, Scott Cutler. *Puppets and "Popular" Culture* (London, 1995).

Speaight, George. *The History of the English Puppet Theatre* (London, 1955).

Stanley, Thomas. *The History of Philosophy. The Third Part containing the Socratick Philosophers* (London, 1655).

Stillingfleet, Edward. *Origines Sacrae, or, A Rational Account of the Grounds of Christian Faith* (London, 1662).

Willis, Thomas. *Pharmaceutice Rationalis : Or, the Operations of Medicines in Humane Bodies* (London, 1684), in *Dr. Willis's Practice of Physick* (London, 1684).

Wolf, Richard B. "Shaftesbury's "Signal" Miracle in *A Letter concerning Enthusiasm*." *English Language Notes*, xvi (1978), pp. 21-25.

アイリアノス（著）、松平千秋、中務哲郎（訳）『ギリシア奇談集』（岩波書店、2010年）。

アリストパネス（著）、橋本隆夫（訳）『雲』、『ギリシア喜劇全集1』（岩波書店、2008年）。

ウェルギリウス（著）、岡道夫（訳）『アエネーイス』（京都大学学術出版会、2012年）。

タキトゥス（著）、国原吉之助（訳）『年代記（下）』（岩波書店、2004年）。

テルトゥリアヌス（著）、鈴木一郎（訳）『護教論』、『キリスト教教父著作　第14巻』（教

文館、1987年）。

バティ、ガストン、ルネ・シャヴァンス（著）、二宮フサ（訳）『人形劇の歴史』（白水社、1960年）。

プルタルコス（著）、瀬口昌久（訳）『モラリア2』（京都大学学術出版会、2001年）。

ホラティウス（著）、鈴木一郎（訳）『歌集』、『ホラティウス全集』（玉川大学出版部、2001年）。

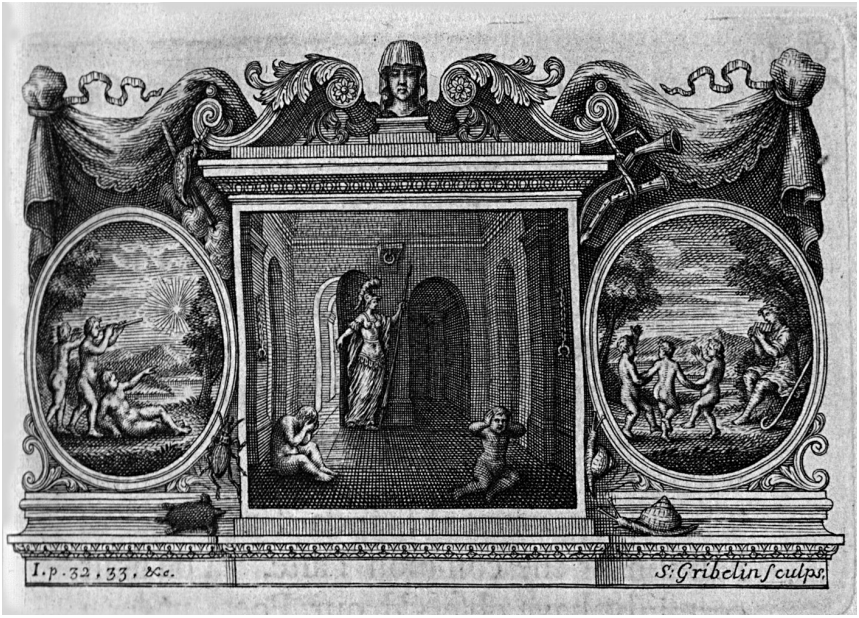
ルクレティウス（著）、藤沢令夫（訳）『事物の本性について』、『世界古典文学全集　第21巻――ウェルギリウス、ルクレティウス』（1965年、筑摩書房）。

菅谷基「第三代シャフツベリ伯爵『熱狂に関する書簡』和訳と解説（上）」、『ICU 比較文化』48号（国際基督教大学比較文化研究会、2016年）、63-98頁。

南川高志『ユリアヌス――逸脱のローマ皇帝』（山川出版社、2015年）。

南隆太「人形劇の政治学――初期近代イギリスにおける娯楽」、佐々木和貴（編）『演劇都市はパンドラの匣を開けるか――初期近代イギリス表象文化アーカイヴ2』（ありな書房、2002年）。

解説
1714年版の挿絵について



図：『熱狂書簡』1714年版の冒頭につけられた挿絵[1]

1714年に出版された『人間、作法、意見、時代の諸特徴』の第2版では、新たに各巻と各収録著作の冒頭にそれぞれの内容を反映した挿絵が追加された。これは1711年より静養のためイングランドを離れていたシャフツベリが、ナポリで客死するまでの間、友人トマス・ミクルスウェイト（Thomas Micklethwayte, 1678-1738）や銅版画家シモン・グリブラン（Simon Gribelin, 1662-1733）の協力によって作成したものである[2]。著述と図像を組み合わせた寓意画集（Emblem Book）の流通によって、教説の要約、記憶、説得といった「広義の意味において教育的な」図像は馴染み深いものとなっていた[3]。この伝統と連続し、またエ

ピグラフとも類似した要約的ないし教育的な役割を果たしているのが、著作の表紙や本文冒頭に掲げられた挿絵である[(4)]。ここでは、シャフツベリが『熱狂書簡』の冒頭に追加した挿絵を、彼の注文書からの引用と補足的な注釈を添えて記述する[(5)]。

挿絵全体は、布の覆いが持ち上げられて、台座に並んだ3つの図が姿を現すという構図になっている。そのうち四角く縁取られた中央の図は、壁に手錠の吊り下がった牢獄の情景を描いている。牢獄の左奥には女神「パラス」が立っており、扉を開けて牢獄の内部へ光を招き入れている（I.3 192）[(6)]。パラスの左手前には「陰気な小太りの少年」が座り込んでおり、怒り恐れながら頑なに目を塞いでいる（I.3 192, 194）。この少年を象徴する「エンブレム」は2つ描かれている。1つは少年の左脇に這っている「モグラ」と「黒い甲虫」であり、当時これらは共に目の見えない生き物とみなされていた（I.3 194）[(7)]。もう1つはモグラたちの上方で逆さまに吊るされている「ランプと松明」であり、火が消え煙が立っていることから目に対応する光の喪失が示唆されている（I.3 194）。一方、牢獄の右手前には先の少年と似た少年が座っており、パラスの呼びかける声を恐れ、背を向け叫びながら耳を塞いでいる（I.3 194）。この少年のエンブレムも先と同様に2つ描かれている。1つは少年の右脇に這っている「カタツムリ」であり、こちらは音の聞こえない生き物を表している（I.3 194）[(8)]。もう1つはカタツムリの上方に吊るされた「トランペット、リュート、縦笛」であり、折られていることから耳に対応する音の喪失が示唆されている（I.3 194）。この牢獄の情景を描いた中央の図の上部には、「目を伏せ、死んだ憂鬱な表情」をした女性の頭部が据えられ、内面と外面の暗さを表現している（I.3 194）。

上に整理した中央の図は、円く縁取られた2つの図に挟まれている。これらの図は共に木立ちと草原の「風景」を描いており、その向こうには雲の浮かぶ空と山々が見晴らせる（I.3 196）。左の図には輝く太陽が描かれており、「自由に」外へ出た3人の少年たちが肉眼や小型望遠鏡でその光を眺めている（I.3 196）。この左の図の情景は、目や光を欠いたものが中央の図の左半分に集められているこ

とと対応している。一方、右の図には杖を置き塚に腰掛けた羊飼いが描かれており、同じく3人の少年たちが羊飼いの吹く葦笛の音に合わせて踊っている（I.3 196）。この右の図の情景は、耳や音を欠いたものが中央の図の右半分に集められていることと対応している。このように、左右の図の要素は中央の図の左右の部分の要素と対応し、共に明朗で開放的な生と陰鬱で閉鎖的な生の対比を表現している。このことは台座の左端の文字列（I.p.32.33.&c）に指示された『諸特徴』第1巻32-33頁（1708年版の49-50頁）の一節とも対応している（I.3 196）[(9)]。「私の理解する限り、宗教の憂鬱な扱い方は宗教を大変悲劇的なものとする扱い方であり、宗教が世にも惨憺たる悲劇を上演する契機なのです。そして私の考えは、宗教を良い作法で扱うのであれば、私たちが頼る明朗さ、そして宗教を吟味する自由と親しみはいくらあっても良いというものです。」（LE 49-50）

注目すべきことに、『熱狂書簡』が「熱狂」を書名として掲げているにもかかわらず、その挿絵は熱狂を主題にはしていない。このことは、1711年版（『諸特徴』第1版収録）につけられた「笑いながら真理を語ることを何が妨げようか？」というエピグラフにも当てはまる。これらのことから、『熱狂書簡』には熱狂への対処という主題に加えて、宗教に対する態度というもう1つの主題があったことがわかる。同時代的背景をふまえて結論すると、『熱狂書簡』は理性と機知の一般的自由という主張によって、フランス預言派の熱狂的活動への個別的な応答とイングランドの宗教社会の一般的な改良を同時に目指した著作であったと言える。

注

（1） 図版の掲載には1714年版の撮影データを使用した。撮影した版は一橋大学社会科学古典資料センター所蔵資料（中山文庫）の1714年版である。同センターの皆様にこの場を借りて深く感謝の意を表したい。

（2） Felix Paknadel. “Shaftesbury’s Illustrations of Characteristics.” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 37 (1974), pp. 291-295 ; Robert Voitle. *The Third Earl of Shaftesbury 1671-1713* (Baton Rouge, 1984), pp. 390-393 ; James Pratt. “Shaftesbury and Gribelin : Anatomy of a Collaboration.” New Ages, *New Opinions*

: *Shaftesbury in his World and Today*, edited by Patrik Muller (Frankfurt am Main : Peter Lang, 2014), pp. 115-121.

（3） ピーター・デイリー（著）、伊藤博明（訳）「エンブレム――序論」、ピーター・デイリー（著）、伊藤博明（監訳）『エンブレムの宇宙――西欧図像学の誕生と発展と精華』（ありな書房、2013年）、14頁；カール・ヨーゼフ・ヘルトゲン（著）、川井万里子、松田美作子（訳）『英国におけるエンブレムの伝統――ルネサンス視覚文化の一面』（慶応義塾大学出版会、2005年）、19、122-125頁。

（4） カール・ヨーゼフ・ヘルトゲン（著）、松田美作子（訳）「エンブレム的タイトル・ページと扉絵――近代初期英国の場合」、デイリー『エンブレムの宇宙』、295-306頁を参照せよ。

（5） 挿絵の内容と意味については Paknadel. “Shaftesbury’s Illustrations of Characteristics.” pp. 305-306が適切に解釈している。ここではより細かい要素や説明を追加し、パクナデルの解説を補うこととする。

（6） The 3rd Earl of Shaftesbury. *Standard Edition : Complete Works, selected Letters and Posthumous Writings. Band I, vol. 3*. edited with a German Translation and a Commentary by Wolfram Benda, Wolfgang Lottes, Friedrich A. Uehlein and Erwin Wolff (Stuttgart, 1992). 本文中ではこの文献をI.3と表記する。パラスは古代ギリシアの女神アテーナーのことであり、武装した姿から同定される。ここでは神話的な属性を表現するというよりも、むしろ『熱狂書簡』が自由寛容の国として描いたアテナイを象徴していると考えられる。

（7） Morris Palmer Tilley. “B219 As blind as a BEETLE” and “M1034 As blind as MOLE” *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (Ann Arbor, 1950).

（8） しかし今回の調査では、「カタツムリに音は聞こえない」という当時の慣用表現ないし寓意画の例が他に見つからなかった。

（9） 同じ台座の右端には「S・グリベリンが彫る（S. Gribelin sculps）」という銅版画家のサインがある（I.3 196, 198）。

参考文献

・二次文献（『熱狂書簡』）

Paknadel, Felix. “Shaftesbury’s Illustrations of Characteristics.” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 37 (1974), pp. 290-312.

Pratt, James. “Shaftesbury and Gribelin : Anatomy of a Collaboration.” *New Ages, New Opinions : Shaftesbury in his World and Today*, edited by Patrik Muller (Frankfurt am Main : Peter Lang, 2014), pp. 115-130.

Tilley, Morris Palmer. “B219 As blind as a BEETLE” and “M1034 As blind as MOLE” *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (Ann Arbor, 1950).

Voitle, Robert. *The Third Earl of Shaftesbury 1671-1713* (Baton Rouge, 1984).

ヘルトゲン、カール・ヨーゼフ（著）、川井万里子、松田美作子（訳）『英国におけるエンブレムの伝統——ルネサンス視覚文化の一面』（慶応義塾大学出版会、2005年）。

デイリー、ピーター（編）、伊藤博明（監訳）『エンブレムの宇宙——西欧図像学の誕生と発展と精華』（ありな書房、2013年）。